

## 3

## 住之江抽水所「せせらぎの里」

農の風景による憩いと和みの空間

塩谷 淳

SHIOYA Atsushi

大阪市は、西側が海に面し、南北に延びる上町台地と、その周囲を取り囲む低地からなっている。そのため、台地等ごく一部を除く約9割の市域で、雨水をポンプによって河川に排水しなければならない。



■写真1ーポンプ棟



■図1ー住之江抽水所位置図



■写真2ー門 平林町は材木のまち

水の都・大阪は、雨に弱く水に悩む大阪でもあったのである。

当社では、このような大阪市の浸水事情に多く携わってきた。そのひとつに、市東南部地域の浸水を解消する下水道施設の整備事業がある。

平成12年4月から本格稼働を開始した「なにわ大放水路」と、この放水路で集水した雨水を、毎秒73m<sup>3</sup>で住吉川に排除可能な大阪市最大級のポンプ場「住之江抽水所」である。

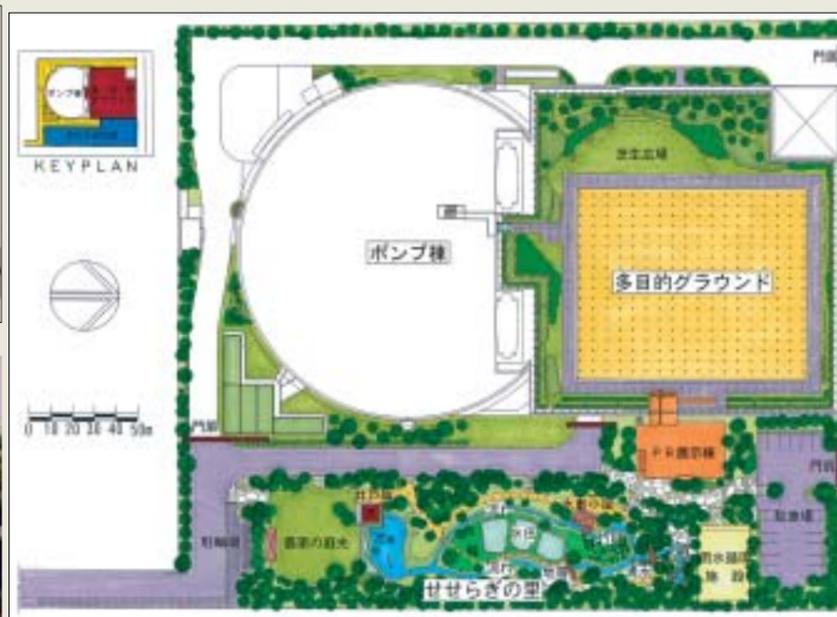
なにわ大放水路は、地下30mで流入し、抽水所最深部は、地下40m

に及ぶ大規模な地下構造物となっている。

地上部には、円形デザインのポンプ棟がひときわ映えると共に、施設完成と併せて整備した市民の憩いと和みの空間「せせらぎの里」(平成12年度いきいき下水道賞を受賞)がある。

現在、大阪市には下水道施設を利用した「せせらぎの里」が6箇所あり、それぞれが特徴を持った市民憩いの場となっている。

本稿では、地域社会に親しまれることを目指した住之江抽水所「せせ



■図2ー一般平面図 敷地の45%を修景整備し、海沿いの工業地帯に貴重な緑と水辺の空間を作った

らぎの里」の概要と公開後の姿を紹介する。

## 1——「せせらぎの里」整備方針

## ●1 下水道資源を活かす

整備にあたっては、地域環境を保全しつつ、潤いのある都市を目指す観点から「そこにある」ものを資源として見直し、限りなく活かしていくことを第一に考えた。

まず、住之江抽水所という施設空間そのものを、地域社会に親しまれる公園・広場として有効利用することとした。

そして、この地域では災害の元にもなる「雨水」を、公園を流れる小川の「せせらぎ水」や「散水・防火・トイレ用水」として有効利用を図った。

さらに、下水汚泥(溶融スラグや焼却灰)から造られた透水性レンガを場内道路に敷き、浸透機能を持つ集水管を使って積極的に地下浸透を図ることとした。

## ●2 雨水の循環を表現する

浸水を解消する役割を担った施設のキーワードは「雨水」である。

その表現を整備計画にどう盛り込むか。多くの議論の結果「降雨ー浸透ー貯水ー流下」という「循環する雨水」に着目した。これを表現する切り口として描いたイメージが、そう遠くない昔「そこにあった」ふるさと住之江の景観であった。

人が手を加えた結果の環境でありながら、雨をはじめとする物質の循環性や、都市には無い生態系が保たれている姿を目指すこととし、この整備の絵姿が、事業者の賛同を得た。

開園から3年。花や実のなる木々が根付き、野草がのびのびと可憐な花を咲かせている。また、水辺にも小さな命が湧き出し、すっかり自然の姿を現している。



■写真3、4ーせせらぎの里農の風景 「わたし達の小さい頃はこうだった!」「地域の方々がホッとくつろげるオープンスペースを」と企画された大阪市下水道整備計画の重点対策施設のひとつである



■写真5ー吟行会でせせらぎの里を散策 「よくこれだけの木や草花を集めましたね」「俳句の景色としてはまさに宝庫」と感嘆の声が上がる



■写真6ーせせらぎの里の稲穂

## 2——「せせらぎの里」計画・設計

## ●1 主題

そう遠くない昔、その生業を残していた「農の風景」を表現した。「湧水・水田・里」の3つのエリアで構成

し、滝・泉・地層から湧き出す水が、水車を廻し、田を潤しながら農家の庭先につながる計画とした。

●2 農のアイテムの導入

来訪者との間に、自然と交流が生まれ、親密さを感じて貰える施設にしたい。そんな願いを込め、人手でコツコツと造られた様な、優しさや

暖かみのある「農の風景」の構成要素を配置した。

●3 木場

戦後、地元平林町には貯木場や木材工場ができ、現在に至っている。地場独特の雰囲気高め、その個性を大切にするため、PR展示棟(上部利用の階段棟)や水車小屋、休憩

舎、門構えに「木調」を取り入れた。

3—「せせらぎの里」公開後

●1 ゆとりの学習での活用

せせらぎの里では、地元の平林小学校児童の手によって、水田(面積100m<sup>2</sup>、稲株数1,300株)の田植えや稲刈りが行われている。



写真7—小さな泉にこんこんと水が湧く



写真8—水光る岸边にセリやクレソン



写真9—縁台につろいでみればそこは農家の庭先である



写真10—喧騒をしばし忘れる水車の音



写真11—水際の階段を下りて野菜を洗う



写真12—井戸端の手押しポンプは人気の的

【なにわ大放水路】

平野区爪破交差点～住之江区泉2丁目の住之江抽水所に至る総延長12.2km、最大内径6.5mの下水道幹線。

地下鉄御堂筋線・四つ橋線の下をくぐるため、幹線最深部は地下30m余りに達する。

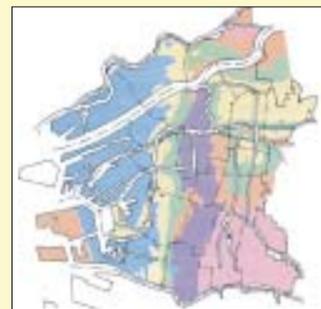


図3—大阪市の地形

凡例	説明
自然排水可能区域	自然排水可能区域
ポンプ排水を必要とする区域	ポンプ排水を必要とする区域
河川排水域以下の低地	河川排水域以下の低地
高層部(0.5m)	高層部(0.5m)
以下となる低地	以下となる低地

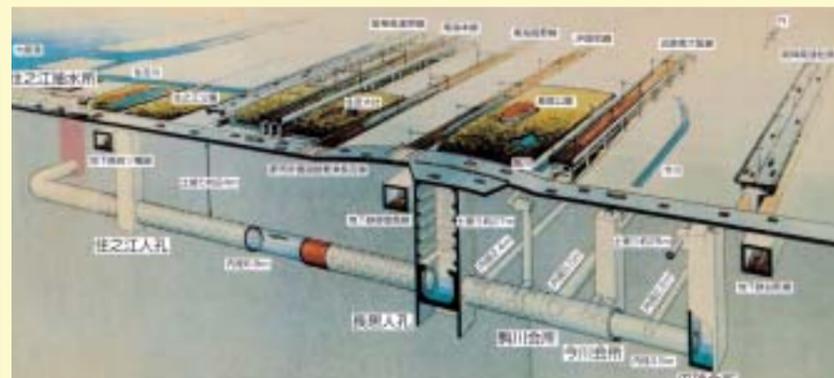


図4—なにわ大放水路のルート



写真13—幹線の内部

【住之江抽水所】

口径2,200mmの主ポンプを6台有し計画排水量73m<sup>3</sup>/秒。

地下のポンプ室は外径81m深さ40.9mの円筒径で、従来の方形と異なることが特徴である

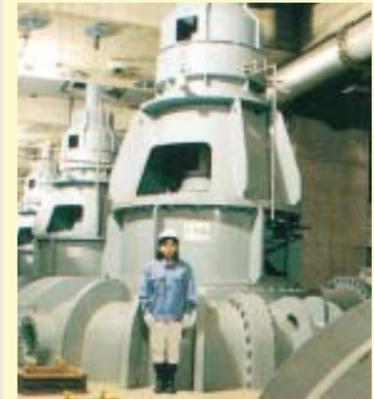


写真14—主ポンプ

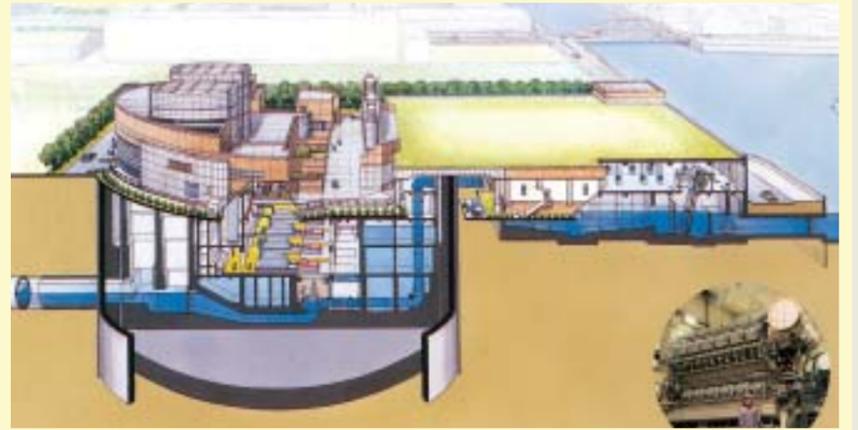


図5—住之江抽水所の断面概要



写真15—ディーゼルエンジンと減速機

●2 吟行での紹介

せせらぎの里には、高木、花木・花物、水辺植物等合わせて百数十種類が植えられ、1年中花が絶えることなく楽しめるようになっている。

せせらぎの里では、これまでに吟行会が開催され、下水道事業関係者の関心を集めている。

すみのえ(水の澄んだ美しい入江)が区名の由来であると言われるように、昔は海であった水はけの悪いこの土地が、先人達によって埋め立てられ、のどかな農村を経て今のまちになった。農村時代の昭和25年頃までは、日照りの際に使う順番を決めて水車で田に水を汲み上げるような苦労もあったようである。

時代は移り、大阪市浸水被害の抜本的対策として、「天王寺～弁天下下水道幹線」や「なにわ大放水路」が建設された。現在も「淀の大放水路」などの建設が進められている。

市営ニュートラムに乗ると、住之江抽水所のあのポンプ棟がかすか



写真16—初めて田植えを経験する児童

に見える。そう遠くない昔、多く見られた農の風景が、市民を守る下水道施設と共にある。「記録に残るポンプ場」と「記憶に残る風景」が、これからも多くの市民の方々に親しまれていくことを願ってやまない。

(資料提供：大阪市都市環境局下水道部)